

第3学年2組 音楽科学習指導案

題 材 歌詞内容に合う歌い方を工夫し、混声合唱で充実した響きをつくろう
教 材 合唱曲「蒼鷺」

1. 生徒の実態

本学級の生徒は歌うことに抵抗感がなく、明るく素直な性格が歌声にも表れている。しかし「楽しく歌う」ことだけを好み、曲のもっているよさを味わいながら歌ったり、自己のイメージを膨らませて表現を工夫したりする経験が少ない。前題材では合唱コンクールの課題曲を声部の役割に気をつけて歌っている。しかし基本的な発声ができているために、ソプラノの高音が伸びなかったり、アルトが地声で歌ったりすることも少なくない。男声は変声期も終了したため、太く力強い声で歌うことができるものの、「響く」「支える」という点においてはまだ不十分だと思われる。

2. 題材 について

本題材は校内合唱コンクールに向けて設定した題材である。生徒が曲のもっているよさを感じたり、歌詞の内容を理解したりして表現を工夫することができることや、その表現の高まりを実感し、さらに感動的な合唱活動ができることをめざし、「蒼鷺」を教材として設定した。

○教材について

教材分析

(1)「蒼鷺」の楽曲分析

楽曲全体では

曲想	
— 歌詞	；北の大地の雄大な自然に生きる蒼鷺を表現した歌詞
— 形式	；複合三部形式 I (A B C) II (D E) III (F G H I) I' (J) (I' はAが二度上がって演奏される)
— リズム	；Gは十六分音符の細かい刻み 他は四分音符・八分音符を中心にしたリズム
— 旋律	；各パートが動きながら同型反復
— 和声	；主旋律はソプラノで他の声部が掛け合う形の混声四部合唱
— 拍子	；4 / 4 拍子 (Cは部分的に2 / 4 拍子, Eは部分的に3 / 4 拍子, 2 / 4 拍子)
— 調	；二短調→ト短調→ホ短調→変ロ短調→ロ短調→ホ短調
— 唱法	；レガート唱法 (Eはマルカートで歌い, さらにアクセントがついた歌い方)
— 音色	；豊かな深みのある声
— 強弱	；I (p → m f → p) II (p → poco a poco cresc. → f → f f) III (m p → cresc.poco a poco → f → m f) I' (p)
— 速度	； = 8 8 → 1 0 0 → 8 8 → 9 2 → 1 3 2 → 1 0 0 → 7 6 → 8 8 → 1 0 0 → 9 2 → 8 8

特にD・Eの部分では

曲想

- 歌詞 ; 北の大地で、蒼鷺が厳しい寒さに耐えている様子をあらわした歌詞
- 形式 ; 通作形式 (Eは a a' b b'的な形)
- リズム ; 全体的に八分音符を中心にしたリズム
- 旋律 ; 4拍子の第4拍からはじまる弱起旋律で、順次進行・同音進行・跳躍進行が含まれている。Eは順次進行・同音進行・跳躍進行
- 和声 ; 混声四部合唱
- 拍子 ; 4/4拍子ではじまり、Eは21小節目3/4拍子、23小節目2/4拍子と変化し、24小節目から4/4拍子に戻る
- 調 ; Eの12小節目まではホ短調
13小節目から変ロ短調→嬰へ長調→ロ短調
- 唱法 ; レガート唱法で始まりEはマルカート唱法
- 音色 ; 豊かな深みのある声から張りのある声
- 強弱 ; pではじまり3小節目から poco a poco cresc.でEへ
Eはfで始まり18小節目から poco a poco cresc.
- 速度 ; $\text{♩} = 92$ ではじまり3小節目から accel. Eの $\text{♩} = 132$ へと変化する
さらに20小節目から Risoluto ($\text{♩} = 100$) 26小節目から rit

特にF・G・H・Iの部分では

曲想

- 歌詞 ; 北海道の自然の季節の移り変わりの中に生きる蒼鷺の様子と魂がなくなっていく様子をあらわした歌詞
- 形式 ; 通作形式
- リズム ; Gには十六分音符の細かい刻み
- 旋律 ; 4拍子の第4拍からはじまる弱起旋律で、順次進行・同音進行・跳躍進行が含まれている。またHの8小節目ではソプラノがオクターブ跳躍する
- 和声 ; 混声三部合唱
- 拍子 ; 4/4拍子
- 調 ; ロ短調→ホ短調へ移調
- 唱法 ; レガート唱法 (Gはマルカート唱法に近い歌い方)
- 音色 ; 豊かな深みのある声
- 強弱 ; m pではじまりGから cresc. poco a pocoでHへ。Hの8小節目から f fになりIにむけて decresc.から pへと変化する
- 速度 ; $\text{♩} = 76$ ではじまり4小節目から poco accel. G $\text{♩} = 88$ H $\text{♩} = 100$
poco rit.をかけながら I $\text{♩} = 92$ に入り、再び rit.して Tempo I ($\text{♩} = 88$)

(2) 「蒼鷺」の教材解釈

歌 詞	楽 曲 の 構 成			
	小節	調	強さ	速さ
D 北の大地で、蒼鷺が厳しい寒さに耐えている様子 ・耳毛がかすかに震えながらじっと聴いている様子は、言葉をていねいに歌って表現する。 ・「寂寞の極み」から poco a poco cresc.ed accel.で表現する。	1	E m	P	= 92
	2	D		
	3	C	poco a poco cresc.	accel
	4	A m		
	5	D 7		
	6	G		
	7	B 7		
E 蒼鷺を取り巻く北の大地の厳しい自然 ・小節数が一番長くこの曲の1つ目のヤマ場である。 ・「胸毛を震はす絶望の季節か」「凍れる川の底流の音か」は、ソプラノとテノール、アルトとバスが同じような旋律・リズムで繰り返し掛け合うことで、歌詞の情景描写を表現する。 ・9小節目からは、転調しながら20小節目の「青空への熱情か」(Risoluto (決然と))へ気持ちを高めていく。 ・「熱情か」は3拍子2拍子4拍子と拍子に変化しながら3回繰り返すことで迫力を出して歌う。	1	E m	f	= 132
	2	E m		
	3	A m		
	4	A m		
	5	D		
	6	D		
	7	G		
	8	B 7		
	9	E m		
	10	E m		
	11	A m		
	12	A m		
	13	F		
	14	F		
	15	B ♭ m		
	16	B ♭ m		
	17	F ♯		
18	B m	poco a poco cresc.		
19	G			
20	G ♯ 7	f f	= 100	
21	F ♯ 7			
22	F ♯ 7			
23	F ♯ 7			
24	C ♯ 7			
25	C ♯ 7		rit	
26	F ♯ 7			
27	F ♯ 7			
F 北の自然の移り変わりを風で表現している ・旋律の流れをレガートで歌うことで場面転換を表現する	1	B m	m p	= 76
	2	F ♯ m		
	3	G		
	4	F ♯		poco accel
G どんなに季節が変わろうともその場を動かない蒼鷺を表現している ・3回繰り返される「だが 蒼鷺は」を段階的に大きく歌い、「動かぬ」でフレーズの山をつくる	1	B m	m f	= 88
	2	G	crese. poco a poco	
	3	E m E ♯ 7		
	4	F ♯	アクセント	
H 蒼鷺の最期 (痩せ細り風に削られ枯骨になる)	1	B m	f	= 100
	2	E m		
	3	C ♯ 7		

	<ul style="list-style-type: none"> この曲の2回目の盛り上がる部分である 男声と女声が繰り返しかけ合いながら「痩せ細り風に削られ許さぬ枯骨となり」へと曲を盛り上げていく 	4 F # 7 5 B m B 6 E m 7 C # C # 7 8 F # 9 B m 1 0 C 1 1 A m 1 2 B 7	f f f decrease	poco rit.
I	蒼鷺の最期（青い影になる） <ul style="list-style-type: none"> この曲の終息する部分である。 「こおっ・た」「動かぬ」の発音に注意して歌い「静」の様子を表現する 	1 E m E 2 A m 3 E m B 7 4 E m 5 E m	m f decrease. p decrease.	= 92 rit. Tempo I = 88

(3) この教材に期待できること

北海道の雄大な自然を表したスケールの大きい曲であり、詩の情景描写の美しさと曲の構成のおもしろさが、中学生にも興味を持たせる曲だと思われる。大曲といってもよく、3年生が取り組むに適した合唱曲である。速さの変化に特徴があり、 $= 88 \rightarrow 100 \rightarrow 88 \rightarrow 92 \rightarrow 132 \rightarrow 100 \rightarrow 76 \rightarrow 88 \rightarrow 100 \rightarrow 92 \rightarrow 88$ とたいへん複雑になっている。また、歌詞内容に合わせて $p \sim f f$ と強さの変化も明確であり、詩の気持ちを探りながら速度や強弱を工夫することができる曲である。曲が長く、これまでに歌った曲に比べ難易度も高いので、最後まで力を持続させることが大変であるが、できあがったときの感動も大きいのではないかと思われる。

3. 指導にあたって

本題材の指導にあたっては、歌詞内容を理解し、自分たちなりのイメージをもって自分たちなりの表現をつくり上げることを大切にしたい。まず、歌詞を読み範唱CDを聴いて歌詞の情景、曲の雰囲気をも十分につかませる。次に、パート別テープを使って自分のパートを正しい音程で歌い、声部の役割を感じて合唱できるようにする。そして、歌詞の表す情景に合う歌い方を工夫させる。ここでは、曲が最も盛り上がるD～Eの部分とF～Iの部分の2カ所を中心に工夫させる。強いか弱いか、速いか遅いかだけで判断させると、曲がぎくしゃくして好ましい合唱にはならないので、歌いながら工夫させるようにする。生徒に表現の高まりを感じさせるためには、工夫したことが表現の変化として表れるよう支援を行う。

4. 指導目標

○歌詞の内容に合う、美しく充実した響きのある合唱をつくりあげようとする。

(関心・意欲・態度)

○歌詞の内容、曲想に合う表現を工夫することができる。(音楽的な感受や表現の工夫)

○声部の役割や表現の工夫を生かして合唱することができる。(表現の技能)

5, 指導計画

段階	時	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援
つかむ	第1時	1. 「今日から明日へ」を歌う。 2. 「蒼鷺」の範唱CDを聴き、本時学習について話し合う。 (1) 「蒼鷺」の歌詞を朗読し、歌詞から伝わってくる曲の背景をつかむ。 (2) 範唱CDを聴き旋律の流れから曲の雰囲気を感じ取る。 (3) 本時のめあてを確認する。	○発声練習と、既習した内容の確認も含めてのびのびと歌わせる。 ○歌詞を何度も読ませることと範唱CDを聴かせることで詩の情景描写をつかませる。
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">自分のパートを正しい音程で歌えるようになるろう</div> 3. 各パートに分かれてパート練習をおこなう。 4. 自己評価をおこない、次時の学習について話し合う。	○音程の不安定な生徒は教師が各パートを巡回し個別に指導する。 ○自己評価カードに、具体的な学習の成果を書くように促す。 ○パート毎の練習用テープを渡し、次時までには正しい音程で歌えるよう意識化を図る。
深める	第2時	1. 前時を想起し本時学習について話し合う。 (1) 「今日から明日へ」を合唱し「蒼鷺」のパート練習をおこなう。 (2) 前時の反省と本時のめあてを確認する。	○各パートとも、どの部分を意識して練習するかを確認してから練習に入る。
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">自分の声部と他の声部の役割を感じながら合唱をしよう。</div> 2. 声部の役割のかかわりに気を付けて歌う。 (1) 範唱CDを聴き、声部の役割について話し合う。 (2) 部分的に取り出して歌い、声部の役割を確かめる。 ・三部合唱で ・ゆっくりとしたテンポで ・無伴奏や左手の伴奏だけ入れて 3. 自己評価をおこない、次時の学習について話し合う。	○お互いのパートを聴き合いながら歌わせる。 ○拡大楽譜で主旋律を確認したり声部の役割について説明したりする。 ○自己評価表に、具体的な学習の成果を書くように促す。 ○表現を工夫したい点を楽譜に書き込ませ、次時学習への意識化を図る。

深める	第3時	1. 前時を想起し本時学習について話し合う。 (1) 「今日から明日へ」「蒼鷺」を歌う。 (2) 前時の反省と本時のめあてを確認する。	○発声練習と前時の確認も含めて歌わせる。
	本時	歌詞の内容を考えて表現を工夫しよう	
味わう	第4時	1. 前時を想起し本時学習について話し合う。 (1) 「今日から明日へ」「蒼鷺」を歌う。 (2) 前時の反省と本時のめあてを確認する。	
		歌詞の内容や曲想を味わい、曲にふさわしい合唱をつくりあげよう。	
		2. D～I以外の部分について表現の工夫をする。 3. 全曲を通して歌い、表現をまとめる。 4. 本題材の学習を振り返り、合唱コンクールについて話し合う。 5. 合唱コンクールに向けての確認と自己評価をおこなう。	○それぞれの役割に気づかせ、最高の声をつくりあげるように促す。 ○今までの練習をふり振り返り、合唱コンクールへの意識を高めさせる。

6, 本時 平成16年10月14日(木) 5校時(3/4) 第1音楽室にて

本時の目標

- 自分たちが選んだ部分の歌詞をよく読み、グループで協力して情景に合う歌い方を工夫している。(関心・意欲・態度)
- 自分が選んだ部分の歌詞の情景にあう、強弱や速度の変化を工夫することができる。
(音楽的な感受や表現の工夫)
- 自分たちが工夫した強弱や速度の変化を合唱で表現することができる。(表現の工夫)

準備 ・楽譜 ・ピアノ ・スマートボード ・パソコン ・プロジェクター
 ・電子ピアノ ・CDラジカセ ・パート別テープ ・自己評価表
 ・黒板 ・拡大楽譜 ・マジック

展開

学 習 活 動 と 内 容	支 援
1. 前時を想起し本時学習について話し合う。 (1) 「今日から明日へ」「蒼鷺」を歌う。 (2) 前時の反省と本時のめあてを確認する。	○発声練習と既習した内容の確認も含めて、のびのびと歌わせる。 ○本時はD～EとF～Iの2カ所について2グループに分かれて表現の工夫を確認する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 歌詞の内容を考えて表現を工夫しよう </div>	○説明の内容がより分かりやすく理解できるように、スマートボードを使用する。 ○前時に個別に書かせておいた表現方法の工夫をまとめたものを学習プリントとして生徒に配布し、本時の楽譜として使用させる。
2. グループに分かれて練習する。 【D～Eグループの表現工夫共通部分】 ・「耳毛～」→やさしく入る ・「寂寞の～」→サビの前なのでだんだん強く ・「胸毛を震はす～」→強くはっきりと歌う ・「青空への」→言葉をはっきりと歌う 【F～Iグループの表現工夫部分】 ・「風は～」→静かに入る ・「動かぬ」→強くはっきりと歌う ・「魂が魂が～」→だんだん強く など	○グループ練習では、リーダーを中心に練習させる。 ○各グループともに共通して工夫したいと考えた箇所から練習を始めさせる。 ○表現の工夫において相対する意見がでた箇所は、それぞれ歌ってみて確かめるよう助言する。 ○工夫の仕方がよく理解できずに歌っている生徒は、教師が各グループを巡回し、個別に指導・助言(声かけ)する。

<p>3. グループで工夫した表現を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表現を高めるためにどんな工夫をしたか ・工夫してどんな変化を感じたか ・実際に歌って発表 	<ul style="list-style-type: none"> ○お互いに表現方法を出し合う場の設定をする。 ○どのように表現したいと考えたのか、その理由等を説明させてから歌わせる。 ○生徒からの説明が足りない部分は教師が補足説明する。 ○表現の工夫の変化が見られた部分においては賞賛の言葉かけをおこない、見えにくい部分は表現方法をアドバイスする。 ○発表の後自己評価や相互評価をさせる。 ○各グループから出された工夫点をまとめる。
<p>4. グループの工夫を生かして合唱する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・工夫した点を確認しながら ・D～Iの部分を全員で 	<ul style="list-style-type: none"> ○工夫した部分や表現方法を記入した拡大楽譜を前面に掲示し、確認しながら合唱できるようにする。 ○十分に変化が表れない部分については、教師が指揮をしながら専門的な指導を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・強さの変化を表すための呼吸の仕方や、弱い部分の歌い方 ・速度が上がるところは乱暴に歌わずに歯切れ良く歌う など
<p>5. 本時学習をふり返り次時学習について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の表現との聴き比べ ・自己評価活動 ・次時はD～I以外の部分も工夫をして表現を仕上げる 	<ul style="list-style-type: none"> ○聴き比べしやすいように、前時と本時の合唱を録画したものを見せる。 <ul style="list-style-type: none"> ・表現の高まりに気を付けて ○自己評価表に具体的な学習の成果を書くように促す。 ○前時に比べて表現の高まった部分や努力を賞賛し、達成感を味わわせるとともに次時への意欲付けを行う。